

少女病

田山花袋



山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場よよぎの崖下がけしたを地響きさせて通るころ、千駄谷せんだがやの田畝たんぼをてくてくと歩いていく男がある。この男の通らぬことはいかな日にもないのなで、雨の日には泥濘でいねいの深い田畝道たんぼみちに古い長靴ながぐつを引きずっていきし、風の吹く朝には帽子を阿弥陀あみだにかぶって塵埃じんあいを避けるようにして通るし、沿道の家々の人は、遠くからその姿を見知って、もうあの人を通ったから、あなたお役所おそが遅くなりなますなどと春眠いぎたなき主人を揺り起こす軍人の細君もあるくらいだ。

この男の姿のこの田畝道にあらわれ出したのは、今からふた月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作がかなたの森かどの角、こなたの丘の上にでき上がって、某少将の邸宅、某会社重役の

邸宅などの大きな構えが、武蔵野のなごりの櫟の大並木の間からちらちらと画のように見えるころであつたが、その櫟の並木のかなたに、貸家建ての家屋が五、六軒並んであるというから、なんでもそこらに移転して来た人だろうとのもつぱらの評判であつた。

何も人間が通るのに、評判を立てるほどのこともないのだが、淋しい田舎で人珍しいのと、それにこの男の姿がいかにも特色があつて、そして驚の歩くような変てこな形をするので、なんともいえぬ不調和——その不調和が路傍の人々の閑な眼を惹くもととなつた。

年のころ三十七、八、猫背で、獅子鼻で、反歯で、色が浅黒くツて、頬髯が煩さそうに顔の半面を蔽つて、ちよつと見ると恐ろしい容貌、若い女などは昼間出逢つても気味悪く思うほど

だが、それにも似合わず、眼には柔和なやさしいところがあつて、絶えず何物をか見て憧あこがれているかのように見えた。足のコンパスは思い切つて広く、トットと小さきみに歩くその早さ！演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避けた。

たいてい洋服で、それもスコッチの毛すの摩すれてなくなつた鳶とびいろ色の古背広、上にはおつたインバネスも羊羹ようかんいろ色に黄はんで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄がらにない海老茶えびちやいろ色の風呂敷ふろしき包みをかかえながら、左の手はポケットに入れてい

る。
四よツ目垣めがきの外を通りかかると、

「今お出かけだ！」

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で言った。

その植木屋も新建ちの一軒家で、売り物のひよる松かしやら檜かしや

ら黄楊つげやら八ツ手やらがその周囲にだらしなく植え付けられてあるが、その向こうには千駄谷の街道を持つている新開の屋敷町が参差しんしとして連なつて、二階のガラス窓には朝日の光がきらきらと輝き渡つた。左は角筈つのはずの工場の幾棟、細い煙筒からはもう労働に取りかかつた朝の煙がくろく低く靡なびいている。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてくてくと歩いていく。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣しばがき、檜垣かしがき、要垣かなめがき、その絶え間絶え間にガラス障子、冠木門かぶきもん、ガス燈と順序よく並んでいて、庭の松に霜よけの繩なわのまだ取られずについているのも見える。一、二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が駆け足で通つていくのに邂逅かいこうする。西洋人の大きな洋館、新築の医者だの構えの大きな門、駄菓子だがしを売る古い茅葺かやぶきの家、ここまで来

ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男はその大きな体を先へのめらせて、見栄も何もかまわずに、一散に走るのが例だ。

今日もそこに来て耳を敲そばてたが、電車の来たような氣勢けはいもないので、同じ歩調ですたすたと歩いていったが、高い線路に突き当たって曲がる角で、ふと栗梅くりうめの縮緬ちりめんの羽織をぞろりと着た恰好かっこうの好い庇髪ひさしがみの女の後ろ姿を見た。鶯色うぐいすいろのリボン、繻珍しゅちんの鼻緒はなお、おろし立ての白足袋しろたび、それを見ると、もうその胸はなんとなくときめいて、そのくせどうのこうのと言うのでもないが、ただ嬉うれしく、そわそわして、その先へ追い越すのがなんだか惜しいような気がする様子である。男はこの女を既に見知っているの
で、少なくとも五、六度はその女と同じ電車に乗ったことがある。それどころか、冬の寒い夕暮れ、わざわざ廻まわり路みちをしてそ

の女の家を突き留めたことがある。千駄谷の田畝の西の隅すみで、櫛の木で取り囲んだ奥の大きな家、その総領娘であることをよく知っている。眉まゆの美しい、色の白い頬ほおの豊かな、笑う時言うに言われぬ表情をその眉と眼との間にあらわす娘だ。

「もうどうしても二十二、三、学校に通っているのではなし……それは毎朝逢あわぬのでもわかるが、それにしてもどこへ行くのだろう」と思ったが、その思ったのが既に愉快なので、眼の前にはちらつく美しい着物の色彩が言い知らず胸をそそる。「もう嫁に行くんだらう？」と続いて思ったが、今度はそれがなんだか侘わびしいような惜しいような気がして、「己おれも今少し若ければ……」と二の矢を継いでたが、「なんだばかばかしい、己は幾歳だ、女房もあれば子供もある」と思い返した。思い返したが、なんとなく悲しい、なんとなく嬉しい。

代々木の停留場に入る階段のところ、それでも追い越して、衣きぬずれの音、白粉おしろいの香においに胸おどを躍おどらしたが、今度は振り返りもせず、大足に、しかも駆けるようにして、階段を上った。

停留場の駅長が赤い回数切符を切って返した。この駅長もその他の駅夫も皆この大男に熟している。せっかちで、あわて者で、早口であるということをも知っている。

板囲いの待合所に入ろうとして、男はまたその前に兼ねて見知り越しの女学生の立っているのをめざとくも見た。

肉づきのいい、頬の桃色の、輪郭の丸い、それはかわいい娘だ。はでな縞物しまものに、海老茶の袴はかまをはいて、右手に女持ちの細い蝙蝠傘こうもりがさ、左の手に、紫の風呂敷包みを抱えているが、今日はリボンがいつものと違って白いと男はすぐ思った。

この娘は自分を忘れはすまい、むろん知ってる！ と続いて

思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、あつちを向いている。あのくらいのうちには恥ずかしいんだらう、と思うとたまらなくかわいくなつたらしい。見ぬようなふりをして、幾度となく見る、しきりに見る。——そしてまた眼をそらして、今度は階段のところまで追い越した女の後ろ姿に見入つた。

電車の来るのも知らぬというように——。

二

この娘は自分を忘れはすまいとこの男が思つたのは、理由のあることで、それにはおもしろいエピソードがあるのだ。この娘とはいつでも同時刻に代々木から電車に乗つて、牛込^{うしごめ}まで行くので、以前からよくその姿を見知っていたが、それといつて

あえて口をきいたというのではない。ただ相對して乗っている、よく肥ふとった娘だなアと思う。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこと、りっぱな娘などと続いて思う。それがたび重なる、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子ほくろのあることも、こみ合つりかわった電車の吊皮つりかわにすらりとのべた腕うでの白いことも、信濃町から同じ学校の女学生とおりおり邂逅してはすつぱに会話を交じゆることも、なにもかもよく知るようになって、どこの娘かしらん？ などとその家、その家庭が知りたくなる。

でもあとをつけるほど気にも入らなかつたとみえて、あえてそれを知ろうともしなかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の背広、例の靴くつで、例の道为例のごとく千駄谷の田畝にかかつてくると、ふと前からその肥った娘が、羽織りの上に白い前懸まえかけをだらしなくしめて、半ば解きかけた髪

を右の手で押さえながら、友達らしい娘と何ごとかを語り合
ながら歩いてきた。いつも逢う顔に違つたところで逢うと、な
んだか他人でないような気がするものだが、男もそう思つたと
みえて、もう少しで会釈をするような態度をして、急いだ歩調
をはたと留めた。娘もちらとこつちを見て、これも、「あああの
人だな、いつも電車に乗る人だな」と思つたらしかつたが、会
釈をするわけもないので、黙つてすれ違つてしまった。男はす
れ違いざまに、「今日は学校に行かぬのかしらん？　そうか、試
験休みか春休みか」と我知らず口に出して言つて、五、六間無
意識にtekuteくと歩いていくと、ふと黒い柔かい美しい春の土
に、ちようど金屏風きんびょうぶに銀で画かいた松の葉のようにそつと落ちて
いるアルミニウムの留針ピン。

娘のだ！

いきなり、振り返って、大きな声で、

「もし、もし、もし」

と連呼した。

娘はまだ十間ほど行つたばかりだから、むろんこの声は耳に入つたのであるが、今すれ違つた大男に声をかけられるとは思わぬので、振り返りもせず、友達の娘と肩を並べて静かに語りながら歩いていく。朝日が美しく野の農夫の鋤すきの刃に光る。

「もし、もし、もし」

と男は韻を押ふんだように再び叫んだ。

で、娘も振り返る。見るとその男は両手を高く挙あげて、こつちを向いておもしろい恰好かつこうをしている。ふと、気がついて、頭に手をやると、留針ピンがない。はつと思つて、「あら、私、嫌いやよ、留針を落としてよ」と友達に言うでもなく言つて、そのまま、ば

たばたとかけ出した。

男は手を挙げたまま、そのアルミニウムの留針を持って待っている。娘はいきせき駆けてくる。やがてそばに近寄った。

「どうもありがとう……」

と、娘は恥ずかしそうに顔を赧あかくして、礼を言った。四角の輪廓をした大きな顔は、さも嬉しそうににこにここと笑って、娘の白い美しい手にその留針を渡した。

「どうもありがとうございました」

と、再びいいねいに娘は礼を述べて、そして踵きびすをめぐらした。

男は嬉しくてしかたがない。愉快でたまらない。これである娘、己おれの顔を見覚えたナ……と思う。これから電車で邂逅かいこうして

も、あの人が私の留針を拾ってくれた人だと思うに相違ない。もし己が年が若くつて、娘が今少し別嬪べっぴんで、それでこういう幕

を演ずると、おもしろい小説ができるんだなどと、とりとめもないことを種々に考える。聯想れんそうは聯想を生んで、その身のいたずらに青年時代を浪費してしまったことや、恋人で娶めとった細君の老いてしまったことや、子供の多いことや、自分の生活の荒涼としてゐることや、時勢におくれて将来に発達の見込みのないことや、いろいろなことが乱れた糸のように纏もつれ合つて、こんながらがつて、ほとんど際限がない。ふと、その勤めている某雑誌社のむずかしい編集長へんしゅうちようの顔が空想の中にありありと浮かんだ。と、急に空想を捨てて路を急ぎ出した。

三

この男はどこから来るかと言うと、千駄谷せんだがやの田畝たんぼを越して、

櫟くぬぎの並木の向こうを通つて、新建ちのりつぱな邸宅の門をつらねている間を抜けて、牛の鳴き声の聞こえる牧場、櫿かしの大樹に連なつてゐる小径こみち——その向こうをだらだらと下つた丘陵おかの蔭かげの一軒家、毎朝かれはそこから出てくるので、丈たけの低い要垣かなめがきを周囲に取りまわして、三間くらいと思われる家の構造つくり、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雑ぞんざいな普請ふしんであることがわかる。小さな門を中に入らなくとも、路みちから庭や座敷がすつかり見えて、篠竹しのだけの五、六本生はえてゐる下に、沈丁花じんちようげの小さいのが二、三株咲いてゐるが、そのそばには鉢植はちうえの花ものが五つ六つだらしなく並べられてある。細君らしい二十五、六の女がかいかいしく櫿掛たすきがけになつて働いてゐると、四歳くらいの男の児こと六歳くらいの女の児とが、座敷の次の間の縁側の日当たりの好いところに出て、しきりに何ごとをか言つて遊んで

いる。

家の南側に、釣瓶つるべを伏せた井戸があるが、十時ころになると、
天気さえよければ、細君はそこに鹽たらいを持ち出して、しきりに洗濯せんたく
をやる。着物を洗う水の音がざぶざぶとのどかに聞こえて、隣
の白蓮びやくれんの美しく春の日に光るのが、なんとも言えぬ平和な趣を
あたりに展ひらげる。細君はなるほどもう色は衰えているが、娘盛
りにはこれでも十人並み以上であつたらうと思われる。やや旧
派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、着物
は木綿の縞物しまものを着て、海老茶色えびちやいろの帯の末端すえが地について、帯揚
げのところ、洗濯の手を動かすたびににかすかに揺うごく。しばらく
くすると、末の男の児が、かアちゃんかアちゃんと遠くから呼
んできて、そばに來ると、いきなり懷ふところの乳を探つた。まあお待
ちよと言つたが、なかなか言うことを聞きそうにもないので、

洗濯の手を前垂れまえだでそそくさと拭ふいて、前の縁側に腰をかけて、子供を抱かかいてやった。そこへ総領の女の児も来て立たっている。

客間兼帯の書齋は六畳で、ガラスの嵌はまった小さい西洋書箱ほんばこが西の壁につけて置かれてあつて、栗くりの木の机がそれと反対の側に据すえられてある。床の間には春蘭しゅんらんの鉢はちが置かれて、幅物はにせもの偽物の文晁ぶんちようの山水だ。春の日が室へやの中までさし込むので、実に暖かい、気持ちが良い。机の上には二、三の雑誌、硯箱すずりばこは能代塗りの黄いろい木地の木目が出ているもの、そしてそこに社の原稿紙らしい紙が春風に吹かれている。

この主人公は名を杉田古城といつて言うまでもなく文学者。若いころには、相応に名も出て、二、三の作品はずいぶん喝采かつさいされたこともある。いや、三十七歳の今日、こうしてつまらぬ雑誌社の社員になつて、毎日毎日通つていつて、つまらぬ雑誌

の校正までして、平凡に文壇の地平線以下に沈没してしまおうとはみずから思わなかつたであろうし、人も思わなかつた。けれどこうなつたのには原因がある。この男は昔からそうだが、どうも若い女に憧れるという悪い癖がある。若い美しい女を見ると、平生は割合に鋭い観察眼もすつかり權威を失つてしまふ。若い時分、盛んにいわゆる少女小説を書いて、一時はずいぶん青年を魅せしめたものだが、観察も思想もないあくがれ小説がそういつまで人に飽きられずにいることができよう。ついにはこの男と少女ということが文壇の笑い草の種となつて、書く小説も文章も皆笑い声の中に没却されてしまった。それに、その容貌ようぼうが前にも言つたとおり、このうえもなく蛮ばんカラなので、いよいよそれが好いコントラストをなして、あの顔で、どうしてああだろう、打ち見たところは、いかな猛獣たかとでも闘うという

ような風采と体格とを持つているのに……。これも造化の戯れの一つであろうという評判であった。

ある時、友人間でその噂うわさがあつた時、一人は言った。

「どうも不思議だ。一種の病気かもしれないよ。先生のはただ、あくがれるというばかりなのだからね。美しいと思う、ただそれだけなのだ。我々なら、そういう時には、すぐ本能の力が出してきて、ただ、あくがれるくらいではどうしても満足ができません」

「そうとも、生理的に、どこか陥落ロストしているんじゃないかしらん」

と言つたものがある。

「生理的と言うよりも性質じゃないかしらん」

「いや、僕はそうは思わん。先生、若い時分、あまりにほしい

ままなことをしたんじゃないかと思うね」

「ほしいままとは？」

「言わずともわかるじゃないか……。ひとりであまり身を傷つけたのさ。その習慣が長く続くと、生理的に、ある方面がロストしてしまつて、肉と霊とがしつくり合わんそうだ」

「ばかな……」

と笑つたものがある。

「だって、子供ができるじゃないか」

と誰かが言った。

「それは子供はできるさ……。」と前の男は受けて、「僕は医者
に聞いたんだが、その結果はいろいろあるそうだ。はげしいの
は、生殖の途みちが絶たれてしまうそうだが、中には先生のように
なるのもあるということだ。よく例があるつて……。僕にいろい

る教えてくれたよ。僕はきつとそうだと思う。僕の鑑定は誤らんさ」

「僕は性質だと思いがね」

「いや、病気ですよ、少し海岸にでも行つていい空気でも吸つて、節慾しなければいかんと思う」

「だって、あまりおかしい、それも十八、九とか二十二、三とかなら、そういうこともあるかもしれんが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもなろうというんじゃないか。君の言うことは生理学万能で、どうも断定すぎるよ」

「いや、それは説明ができる。十八、九でなければそういうことはあるまいと言うけれど、それはいくらかもある。先生、きつと今でもやつているに相違ない。若い時、ああいうふうで、むやみに恋愛神聖論者を気どつて、口ではきれいなことを言つてい

でも、本能が承知しないから、ついみずから傷つけて快を取るというようなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能の充分の働きをすることができなくなる。先生のはきつとそれだ。つまり、前にも言ったが、肉と霊とがしつくり調和することができんのだよ。それにしてもおもしろいじゃないか、健全をもつてみずからも任じ、人も許していたものが、今では不健全も不健全、デカダンの標本になつたのは、これと
いうのも本能をないがしろにしたからだ。君たちは僕が本能万能説を抱いだいているのをいつも攻撃するけれど、実際、人間は本能がたいせつだよ。本能に従わん奴やつは生存しておられんさ」と
滔々とうとうとして弁じた。

電車は代々木を出た。

春の朝は心地こころちが好い。日がうらうらと照り渡つて、空気はめずらしくくつきりと透すき徹とおつてゐる。富士の美しく霞かすんだ下に大きい櫟林くぬぎばやしが黒く並んで、千駄谷せんだがやの凹地くぼちに新築の家屋の参差さんしとして連なつてゐるのが走馬燈のように早く行き過ぎる。けれどこの無言の自然よりも美しい少女の姿の方が好いので、男は前に相對した二人の娘の顔と姿とにほとんど魂を打ち込んでいた。けれど無言の自然を見るよりも活いきた人間を眺ながめるのは困難なもので、あまりしげしげ見て、悟られてはという気があるので、わきを見てゐるような顔をして、そして電光いなすまのように早く鋭くながし眼を遣つかう。誰だか言つた、電車で女を見るのは正面ではあまりまばゆくつていけない、そうかと言つて、あまり離れて

もきわだつて人に怪しまれる恐れがある、七分くらいに斜はすに對して座を占めるのが一番便利だと。男は少女にあくがれるのが病であるほどであるから、むろん、このくらいの秘訣ひけつは人に教わるまでもなく、自然にその呼吸を自覺して、いつでもその便利な機会を攫つかむことを過あやまらない。

年上の方の娘の眼の表情がいかに美しい。星——天上の星もこれに比べたならその光を失うであろうと思われた。縮緬ちりめんのすらりとした膝ひざのあたりから、華奢きゃしゃな藤色の裾すそ、白足袋しろたびをつまだてた三枚襲さんまいがさねの雪駄せつた、ことに色の白い襟首えりくびから、あのむっちりちっぷさと胸が高くなつてゐるあたりが美しい乳房ちゅうぶさだと思つたと、掻かきむしられるような気がする。一人の肥ふとつた方の娘は懐ふところからノートブックを出して、しきりにそれを読み始めた。

すぐ千駄谷駅に來た。

かれの知りおる限りにおいては、ここから、少なくとも三人の少女が乗るのが例だ。けれど今日は、どうしたのか、時刻がおく後れたのか早いのか、見知っている三人の一人だも乗らぬ。その代わりに、それは不器量ぶきりような、二目とは見られぬような若い女が乗った。この男は若い女なら、たいていな醜い顔にも、眼が好いとか、鼻が好いとか、色が白いとか、襟首が美しいとか、膝の肥り具合が好いとか、何かしらの美を発見して、それを見て楽しむのであるが、今乗った女は、さがしても、発見されるような美は一か所も持つておらなかつた。反歯そつぱ、ちぢれ毛、色黒、見ただけでも不愉快なのが、いきなりかれの隣に来て座を取つた。

しなのまち

信濃町の停留場は、割合に乗る少女の少ないところで、かつて一度すばらしく美しい、華族の令嬢かと思われるような少女

と膝を並べて牛込まで乗った記憶があるばかり、その後、今一度どうかして逢あいたいのもの、見たいものと願ねがっているけれど、今日までついぞかれの望は遂げられなかった。電車は紳士やら軍人やら商人やら学生やらを多く載のせて、そして飛竜のごとく駛はしり出した。

トンネルを出て、電車の速力がやや緩ゆるくなったところから、かれはしきりに首を停車場の待合所の方に注いでいたが、ふと見馴みなれたりボンの色を見得たとみえて、その顔は晴れ晴れしく輝いて胸は躍おどった。四ツ谷からお茶の水の高等女学校に通う十八歳くらいの少女、身装みなりもきれいに、ことにあでやかな容色きりよう、美しいといつてこれほど美しい娘は東京にもたくさんはあるまいと思われる。丈せいはすらりとしているし、眼は鈴を張ったようにぽつちりしているし、口は緊しまつて肉は瘦やせず肥ふとらず、晴れ晴れした

顔には常に紅が漲みなぎっている。今日はあいにく乗客が多いので、そのまま扉のそばに立ったが、「こみ合いますから前の方へ詰めてください」と車掌の言葉に余儀なくされて、男のすぐ前のところに来て、下げ皮に白い腕を延べた。男は立って代わってやりたいとは思わぬではないが、そうするとその白い腕が見られぬばかりではなく、上から見おろすのは、いかにも不便なので、そのまま席を立とうともしなかった。

こみ合つた電車の中の美しい娘、これほどかれに趣味深くうれしく感ぜられるものはないので、今までにも既に幾度となくその嬉うれしさを経験した。柔かい着物が触る。えならぬ香水のかおりがする。温あたかい肉の触感が言うに言われぬ思いをそそる。ことに、女の髪の毛におの匂いというものは、一種のはげしい望みを男に起こさせるもので、それがなんとも名状せられぬ愉快をかれ

に与えるのであつた。

市谷いちがや、牛込うしごめ、飯田町と早く過ぎた。代々木から乗つた娘は二人とも牛込でおりました。電車は新陳代謝して、ますます混雑を極きわめる。それにもかかわらず、かれは魂を失つた人のように、前の美しい顔にのみあくがれ渡つている。

やがてお茶の水に着く。

五

この男の勤めている雑誌社は、神田かんだの錦町にしきちょうで、青年社という、正則英語学校のすぐ次の通りで、街道に面したガラス戸の前には、新刊の書籍の看板が五つ六つも並べられてあつて、戸を開あけて中に入ると、雑誌書籍のらちもなく取り散らされた室の帳

場には社主のむずかしい顔が控えている。編集室は奥の二階で、十畳の一室、西と南とが塞がふさがっているので、陰気なことおびたらしい。編集員の机が五脚ほど並べられてあるが、かれの机はその最も壁に近い暗いところで、雨の降る日などは、ランプがほしくくらいである。それに、電話がすぐそばにあるので、間断ひっきりなしに鳴ってくる電鈴が実に煩うるさい。先生、お茶の水から外濠線そとぼりせんに乗り換えて錦町三丁目の角かどまで来ておけると、楽しかった空想はすっかり覚さめてしまったような侘わびしい気がして、編集長とその陰気な机とがすぐ眼に浮かぶ。今日も一日苦しまなければならぬかナアと思う。生活というものはつらいものだとすぐあとを続ける。と、この世も何もないような厭いとな気になって、街道の塵埃じんあいが黄いろく眼の前に舞う。校正の穴埋めの厭いとなこと、雑誌の編集の無意味なることがありありと頭に浮かんでくる。ほ

とんど留め度がない。そればかりならまだいいが、半ば覚めてまだ覚め切らない電車の美しい影が、その侘しい黄いろい塵埃の間におぼつかなく見えて、それがなんだかこう自分の唯一の楽しみを破壊してしまうように思われるので、いよいよつらい。

編集長がまた皮肉な男で、人を冷やかすことをなんとも思わぬ。骨折って美文でも書くと、杉田君、またおのろけが出ましたねと突つ込む。なんぞという^{おれ}と、少女を持ち出して笑われる。で、おりおりはむつとして、己は子供じやない、三十七だ、人をばかにするにも程^{ほど}があると憤慨する。けれどそれはすぐ消えてしまうので、懲りることもなく、艶^{つや}っぽい歌を詠^よみ、新体詩を作る。

すなわちかれの快樂というのは電車の中の美しい姿と、美文新体詩を作ることで、社にいる間は、用事さえないと、原稿紙

を延^のべて、一生懸命に美しい文を書いている。少女に関する感想の多いのはむろんのことだ。

その日は校正が多いので、先生一人それに忙殺されたが、午後二時ころ、少し片づいたので一息吐^っいていると、

「杉田君」

と編集長が呼んだ。

「え？」

とそつちを向くと、

「君の近作を読みましたよ」と言つて、笑っている。

「そうですか」

「あいかわらず、美しいねえ、どうしてああきれいに書けるだろう。実際、君を好男子と思うのは無理はないよ。なんとかいう記者は、君の大きな体格を見て、その予想外なのに驚いたと

いうからね」

「そうですかナ」

と、杉田はしかたなしに笑う。

「少女万歳ですな！」

と編集員の一人が相槌あいづちを打って冷やかした。

杉田はむっとしたが、くだらん奴やつを相手にしてもと思つて、他方わきを向いてしまった。実に癩しやくにさわる、三十七の己おれを冷やかす気が知れぬと思つた。

薄暗い陰気な室はどう考えてみても侘なびしさに耐えかねて巻き煙草たばこを吸うと、青い紫の煙がすうと長く靡なびく。見つめていると、代々木の娘、女学生、四谷の美しい姿などが、ごつちやになつて、纏もつれ合つて、それが一人の姿のように思われる。ばかばかしいと思わぬではないが、しかし愉快でないこともない様子だ。

午後三時過ぎ、退出時刻が近くなると、家のことを思う。妻のことを思う。つまらんな、年を老とつてしまったとつくづく慨嘆する。若い青年時代をくだらなく過とごして、今になって後悔したとてなんの役にたつ、ほんとうにつまらんなアと繰り返す。若い時に、なぜはげしい恋をしなかった？ なぜ充分に肉のかおりをも嗅かがなかつた？ 今時分思つたとて、なんの反響がある？ もう三十七だ。こう思うと、気がいらいらして、髪の毛をむしりたくなる。

社のガラス戸を開あけて戸外おもてに出る。終日の労働で頭脳あたまはすっかり勞つかれて、なんだか脳天が痛いような気がする。西風に舞い上がる黄じんいろい塵埃あい、侘わしい、侘わしい。なぜか今日はことさらに侘わしくつらい。いくら美しい少女の髪かみの香かほに憧あこがれたからって、もう自分らが恋をする時代ではない。また恋をしたいたって、

美しい鳥を誘う羽翼はねをもう持つておらない。と思うと、もう生きてゐる価値ねうちがない、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな体格を運びながら考えた。

顔色かおつきが悪い。眼の濁つてゐるのはその心の暗いことを示してゐる。妻や子供や平和な家庭のことを念頭に置かぬではないが、そんなことはもう非常に縁故が遠いように思われる。死んだ方が好い？ 死んだら、妻や子はどうする？ この念はもうかすかになつて、反響を与えぬほどその心は神経的に陥落ロストしてしまつた。寂しき、寂しき、寂しき、この寂しきを救つてくれるものはないか、美しい姿の唯一つでいいから、白い腕にこの身を巻いてくれるものはないか。そうしたら、きつと復活する。希望、奮闘、勉励、必ずそこに生命を発見する。この濁つた血が新しくなれると思う。けれどこの男は実際それによつて、新しい勇

氣を恢復かいふくすることができるかどうかはもちろん疑問だ。

外濠そとぼりの電車が来たのでかれは乗った。敏捷びんしょうな眼はすぐ美しい

着物の色を求めたが、あいにくそれにはかれの願いを満足させるようなものは乗っておらなかった。けれど電車に乗ったということだけで心が落ちついて、これからが——家に帰るまでが、自分の極楽境のように、気がゆつたりとなる。路側みちばたのさまざまの商店やら招牌かんぼんやらが走馬燈のように眼の前を通るが、それがさまざまの美しい記憶を思い起こさせるので好い心地こころちがするのであった。

お茶の水から甲武線に乗り換えると、おりからの博覧会で電車はほとんど満員、それを無理に車掌のいる所に割り込んで、とにかく右の扉の外に立って、しっかりと真鍮しんちゆうの丸棒を攫つかんだ。ふと車中を見たかれははッとして驚いた。そのガラス窓を隔て

てすぐそこに、信濃町しなのまちで同乗した、今一度ぜひ逢いたい、見たいと願っていた美しい令嬢が、中折れ帽や角帽やインバネスにほとんどお圧しつけられるようになって、ちようど鳥からすの群れに取り巻かれた鳩はとといったようなふうになって乗っている。

美しい眼、美しい手、美しい髪、どうして俗悪なこの世の中に、こんなきれいな娘がいるかとすぐ思った。誰の細君になるのだろう、誰の腕に巻かれるのであろうと思うと、たまらなく口惜しく情けなくなつてその結婚の日はいつだか知らぬが、その日は呪のろうべき日だと思つた。白い襟首えりくび、黒い髪うぐいすちや、鶯茶のリボン、白魚のようなきれいな指、寶石入りの金の指輪——乗客が混合こみつているのとガラス越しになつているのを都合のよいことにして、かれは心ゆくまでその美しい姿に魂を打ち込んでしまった。

水道橋、飯田町、乗客はいよいよ多い。牛込うしごめに來ると、ほとんど車台の外に押し出されそうになった。かれは真鍮の棒につかまつて、しかも眼を令嬢の姿から離さず、うつとりとしてみずからわれを忘れるというふうであつたが、市谷に來た時、また五、六の乗客があつたので、押しつけて押しかえしてはいるけれど、ややともすると、身が車外に突き出されそうになる。電線のうなりが遠くから聞こえてきて、なんとなくあたりが騒々しい。ピイと発車の笛が鳴つて、車台が一、二間ほど出て、急にまたその速力が早められた時、どうしたはずみ機会か少なくとも横にいた乗客の二、三が中心を失つて倒れかかつてきたためでもあろうが、令嬢の美にうつとりとしていたかれの手が真鍮の棒から離れたと同時に、その大きな体はみごとにとんぼがえりを打つて、なんのことはない大きな毬まりのように、ころころと線路

の上に転ころがり落ちた。危あぶないと車掌が絶叫したのも遅おそし早し、上りの電車が運悪く地を撼うごかしてやってきたので、たちまちその黒い大きい一塊物は、あなやという間に、三、四間ずるずると引ひき摺ずられて、紅あかい血が一線長ひとすじくレールを染めた。

非常警笛が空気を劈つんざいてけたたましく鳴った。

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和 44）年 10 月 20 日改版初版発行

1974（昭和 49）年 11 月 30 日改版 8 版発行

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000 年 9 月 28 日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。